総合医学会報告

シンポジウム：「診療看護師(JNP)の現状と課題」

# JNP 養成の現状と将来展望
## −指導医師の立場から−

菊野隆明† 辺山 修[1] 鄭 東孝[2]
島田 敦[3] 磯部 陽[3] 山西文子[4]

第66回国立病院総合医学会
（平成24年11月17日 於神戸）

IRYO Vol. 68 No. 7 (337－340) 2014

キーワード 診療看護師

### はじめに

診療看護師の養成は平成22年に始まった．平成22年４月東京医療センター敷地内に東京医療保健大学東が丘看護学部が開設された．それに付随して大学院看護研究科に高度実践看護コースが設置された．１学年の定員20名２年間の修士課程で，52単位1500時間の講義・実習を行い日本最初のクリティカル領域の特定看護師を養成しようとするものである．

### 卒前教育

１年目は解剖学，病態生理，診断学，臨床推論，薬理学などの講義と，縫合，デブリドメント，気管挿管，中心静脈カテーテル挿入，動脈穿刺，超音波検査，人工呼吸器管理などさまざまな医行為の実習，統合演習などを行った．２年目は筆記試験，OSCE（Objective Structured Clinical Examination）試験を経て病院での臨床実習を行った．臨床実習は国立病院機構の東京医療センター，災害医療センター，東京病院で行った．東京医療センター（当院）での実習は救命救急センターあるいは循環器科を６週間，外科を５週間，総合内科を２週間，麻酔科を１週間（初年度）研修した．臨床実習内容はほぼ初期研修医に準じた形で行い，指導医の直接指導下で医行為の実施も経験した．医行為とは厚生労働省『チーム医療推進のための看護業務検討ワーキンググループ作業部会』によって検討され，シミュレーション教育や実習を経て看護師にも実施可能と考えられる特定（医）行為がＢ１，Ｂ２として示されている（図１）．Ｂ１の医行為は行為の侵襲性が相対的に高く，行為の難易度が高いものであり，例として褥瘡の壊死組織のデブリードマン初年度等が挙げられている．Ｂ２の医行為は行為を実施するにあたり詳細な身体所見の把握，実施すべき医行為およびその適時性の判断が必要で，実施者に高度の判断能力が必要とされるものであり，例として脱水の判断と補正(点滴）等が挙げられている．Ｂ１，Ｂ２いずれの医行為も認証を受けた看護師が包括的指示を受けて行うか，医師の具体的指示の下に安全管理体制を整えた

国立病院機構東京医療センター 医療総合支援部 １）小児科，２）総合内科，３）外科，４）看護部（現所属 東京保健医療大学） †医師
（平成25年９月24日受付，平成26年６月20日受理）
Present Status and Future Prospects of JNP Training : From the Viewpoint of the Attending Physician
Takaaki Kikuno, NHO Tokyo Medical Center
(Received Sep. 24, 2013, Accepted Jun. 20, 2014)
**Key Words** : Japanese nurse practitioner (JNP), training